

平成三年。正月の初売り広告をみた私は、大急ぎで家を出た。電機屋へ駆け込み、限定二十個限りの防水ラジオを買ってきたのだ。

帰ると父が呆れはてて言った。

「またラジオを買ってきたのか」

家族の皆は、そんな私を笑っている。そう言われれば、あのゲルマニウムラジオ以来、私が買い込んだラジオは有に二十を越えているだろう。

ラジオのスイッチを入れ、畳の上に寝転ぶと、初めてラジオを買った頃が思い出された。

夏から貯めてきたお金が五百円になった時は、東京オリンピックも終わり十二月になっていた。一日十円の小遣いを、少しずつ残してきた。その小銭を何度も数え直し、ジャンパーのポケットに大事に詰め込み家を出た。

昨晚父にたずねた。

「ゲルマラジオ買っていい？」

「そんな物買ってどうするんだ。家にはトランジスタがあるだろう！」

店に行く途中、父の言葉が、空っ風のように頭の中を走り抜けた。

言葉を振り切るように、模型店に飛び込んだ。

「おじさん、ゲルマラジオおくれ」

「このラジオだろう」

三つあるゲルマの中から、私が一番欲しかったラジオを取り出した。週に一、二度、店に通っては見入っていたので、すぐに判ったのだろう。

「ゲルマだから良く聞こえないぞ。もっと良い二石とか六石のラジオじゃないと駄目だよ。どうする？」

「いいんだ。はい五百円ね」

満足した気持ちの中に、何か後ろめたい気持ちが混じりあっていた。

家に着くなり二階に駆け上り包みをといた。アンテナになるプラグをコンセントに差し込み、ゆっくりと選局つまみをまわすと、イヤホンから小さな声が聞こえた。幾ら慎重に選局しても、NHK第1と第2の二局しか入らなかった。

煙草箱位のラジオの裏蓋を外してみると、中はとてもさっぱりしている。バリコン、ゲルマニウムダイオード、抵抗、それに弱々しい線を巻いたコイルだけの構造だった。しかし、小さな箱の中には、新鮮な未知の世界があった。

ラジオは衣裳筆筒の引き出しに隠した。学校から帰ると夕食までの間こっそりラジオを聞いた。内緒で聞き入っている部屋では、父のトランジスタラジオが威厳に満ち、私を見据えている。

やがて一週間もすると誰かに見せたくなくなり、そっと妹を呼んでイヤホンを聞かせた。その夜、父に聞かれた。

「最近ゲルマは諦めたのか？」

「ああ、あんな物良く聞こえないからいらないよ」
横を向いたまま答えた。

次ぎの日曜日、ラジオを聞いていると父が階段を上がってきた。私はあわててラジオを引き出しにほうりこんだ。

「どうだ、良く聞こえるか？」

呆然としている私にゆっくりと話しかけた。

「お父さんが子供の頃は、鉱石ラジオというのを作ったものだ。庭に竹竿を立てて、長い針金を張って聞くんだが、なかなか聞こえなかったものぞ」

恐る恐るゲルマラジオを出して見せた。

中学にはいると、六石ラジオを買った。私のラジオを見て、友人のY君も同じ様な物を買ってきた。ある秋日の授業中、二人は学生服の袖口から器用にイヤホーンを出し、手を耳に当てがいラジオを聞いていた。ちょうどメキシコオリンピックの時で、レスリングの実況中継をしていたのだ。

突如、Y君のラジオが叫んだ。

「アルゼンチン、ワンポイントリードしました！」

何かの拍子で、Y君のイヤホーンプラグが抜けてしまったのだ。一瞬クラス全員の視線が、私達に集まった。先生はラジオを取りあげ、とぼけて言った。

「ほうー、これがトランジスタラジオと言う物か。先生に貸しておけや」

放課後、職員室に呼ばれたY君はお説教をいただき、ラジオを返してもらって出てきた。二人はぶらぶらと、何時もいく駄菓子屋にはいった。

「今日はまったくついてねーや」

「そうだなー：：」

「ハハハハ」

二人は笑いあつて、ラムネの栓を思いっきり開けた。

